

◆2022年2月第3週の礼拝説教

■日時：2022年2月20日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「主において常に喜びなさい。」

■聖書：新約フィリピの信徒への手紙4：2-9（p365）

■讃美歌：120「主はわがかいぬし」・155「山べにむかいて」

お早うございます。

皆様、健康は守られていらっしゃいますか？

このように言うのが、常となってしまいました。

コロナの感染については勿論ですが、それ以外の持病についても細心の注意が求められます。本当に、健康であることが何にも代えて大切であることを、コロナ禍の中であってしみじみと思わせられています。

ところで、お手元に届いた『70周年記念誌』を読まれたでしょうか？

今日受け取られる方や、施設にいらっしゃる方への配布はこれからになるので、全員が読まれた訳ではありませんが、今日与えられた聖書の御言葉とも深く関わるので、お寄せいただいた原稿から幾つかを紹介しながらお話ししたいと思います。

その前に、私の所には、すでに何人もの方から感謝の言葉や感想が寄せられていますが、この教会に最も古くからいらした方で、昨年夏にご自宅近くの教会に転会された方から届いたお便りを紹介します。

「主の御名を賛美いたします。この度は、素晴らしい創立70周年記念誌と週報をお送り下さいまして、ありがとうございました。コロナ禍で主日礼拝がままならない日が続きますが、この時だからこそ信仰の灯をあつく灯し続けなければと祈りつつ主に従ってまいりたいと願っております。祝福をお祈りいたします。」とありました。お元気なようで良かったです。

ところで、記念誌に寄せられた38本の原稿ですが、なぜこれほどまでに心を打つのかです。書くことは力です。そのことを改めて知らされています。

始めにある方から届いた感想のメールから紹介します。

教会員であるその方は、仕事の関係でなかなか礼拝に出席することがかなわず、オンラインで礼拝に参加されています。そのような中で、偶然空いた時間が与えられ、記念誌に載った全ての文章に目を通されました。そして、読み終えた後、次のようなメールを送って下さいました。「皆さんの証の中にわたしも加わっているのだなと思いました」と。

「皆さんの中に、わたしも確かに加わっている。」

礼拝で顔を合わすことが出来なくても、共に集い、讃美し、祈り、メッセージを聴くことが出来なくても、この記念誌を通して確かに自分は立川教会に呼び集められた一人であるとの思いが与えられたと言うのです。そして、この感想は、先週、ある方からいただいたメールの、「大切なことですが、(今日の説教は)自分に語りかけているような感じがしました」とも響き合うのです。それは、牧師と信徒、又信徒と信徒同士が、しっかり結ばれていることを意味しています。フィリピの教会はまさにそのような教会でした。フィリピの信徒はしっかりパウロと繋がり、信徒同士も深い信頼の絆に結ばれ、パウロの困難な伝道を支えました。私の心を打ったのはそれが一つです。

そして、二つ目です。

お名前は出しませんが、お読みになれば分かると思います。無牧の時代を経験されたその方は、そのような状態を招いた責任は自分にもあるのではないかと記されたことです。私は驚きました。なぜ、そこまで正直に、自分の過ちかも知れないことを語れるのかとの驚きでした。そして、その方は、誰をも批判していないのです。それどころか自分の不信仰を語ります。なぜ牧師と心中するぐらいの潔さが自分に無かったのかと。

御前にあって己が砕かれるとは、このようなことだと思いました。

無牧の時代に至るまで、人間同士の軋轢の中で、どれだけ苦しいことがあったか、辛いことがあったかを思います。しかし、その方から、牧師先生を始めとして教会のどの人々に対しても、これまで批判めいたことを語るのを聞いたことがないのです。ただ黙々と与えられた教会の務めを果たされています。その方にとって、人間のなすいかなる業も問題ではなく、教会は建てるも壊すも御手の内にあるとの信仰が与えられているのだと思われました。

そして、その文章は次のような言葉で結ばれていました。珠玉の言葉で、これは私に送られた餞（はなむけ）の言葉としても大切にしたいと思います。即ち、

「主イエスはいと小さきもの、心へりくだった者、心砕けた者が必要であるということ。馬のように勢いと力が有っても、自分というプライドが邪魔をしては、主から与えられる福音を理解することはできない。今、私達の立川教会もまた、プライドを捨て、砕けた心で福音を受け入れ、御心のままになるように祈る教会にバージョンアップしようとしている。主に養われるだけの群れから、主の御用に用いられる群れに。」

「主に養われるだけの群れから、主の御用に用いられる群れに。」

この4月に赴任される保科けい子先生のもとで、さらにバージョンアップするべく、残された40日の日々を、共に手を携えて努力して行きたいと思います。

さらに私の心を打った3つ目です。

文章を書く、そこには力が生まれると言うことです。

私は、その方の悲しみを、この記念誌を通して初めて知りました。

23歳と言う若さで生涯を閉じられた妹さんのことです。その方は次のように記しておられます。「母の信仰を受け継いだのは妹だった。教育学部を卒業して中学校の教師になったが、演奏活動に専念する為退職を決めた年の1月、同僚に誘われたスキー旅行で妙高高原を滑走中、転倒して一瞬にして23年の人生を閉じた。」

そして、その方は、その悲しみを次のような信仰で乗り越えられるのです。

「妹は神様によって定められた人生を歩んだと信じている。穏やかな性格で誰からも愛され、教会の礼拝、奉仕、伊勢湾台風災害地のボランティア、演奏活動・・・と、公私ともに充実した日々を過ごしていた。雪の降る日に富山で生まれ、奇しくもその誕生日に雪の上

から天に召された。出発直前に写した和服で盛装した写真が告別式の遺影となった。」

悲しみは、人生の彩りを深くします。特に愛する人との突然の別離ほど辛い別れはありません。私は6歳の時に一つ下の妹を交通事故で亡くし、初めて別れの悲しみを知りました。

しかし、その方は、信仰によって悲しみを乗り越えられました。先に御許に送った友も含めて「今は皆、召されて神様のお膝元で安らかな日々を送っている」と。

そして又、心深く打たれたのが、次の御二方の文章でした。一人の方は、幼い時の苦しかった思い出、それは疎開先のいじめや貧しさが主な原因でしたが、そのことを淡々と語りつつ、神様との関わりを語ります。「私は淋しくなると『神さま助けて』と夜、床の中で布団をかぶっておいのりのようなことをしました」と。そして、知的障がいを持つ男の子や、自転車乗りの練習をさせてくれた優しい友、又天理教会ウチの子についても触れています。

一時教会を離れることはあっても、高校生の時に再び通い始め、洗礼を受け、今に至るのです。その方の人生は、イエス様にしっかり捕らえられている。

そして、その思いは、もう一人の方の文章とも響き合いました。教会を見つけることが困難な仕事上の旅先で、クリスマスだけでも礼拝に出席したいと必死に教会を尋ね求めるその姿にです。心打たれました。

こうして、どの文章にも、どの文章にも、語られている教会とは一体何でしょうか。

これほどまでに皆を引き付けて止まない教会とは何か、礼拝とは何かを、牧師でありながら私は改めて考えずにはいられませんでした。

そして今日紹介する最後ですが、ある方が寄せられた文章の最後の言葉が心に留まりました。それは、私の知る、ある詩を思い出させたからです。最後の言葉とは、「わたしはあらゆる人の中で最も豊かに祝福されたのだ」と言う J. ロジャー・ルーシーの言葉です。

この言葉から思い出した詩を紹介します。ご存知の方もいらっしゃるかも知れません。アメリカのニューヨーク大学リハビリテーション病院の壁に書かれていたこの詩を知ったのは、もう30年近く前になるでしょうか、まさに仕事の絶頂期にあった友が、クリスマスの朝、脳梗塞で倒れ、彼を見舞った時に、ベッドの脇の壁にこの詩が貼っていたことから知りました。

次のような詩です。

大事をなそうとして、

力を与えて欲しいと神に求めたのに、

慎み深く、従順であるようにと

弱さを授かった。

より偉大なことができるように、

健康を求めたのに、

よりよきことができるようにと

病弱を与えられた。

幸せになろうとして、

富を求めたのに、

賢明であるようにと

貧困を授かった。

世の人々の賞賛を得ようとして、

権力を求めたのに、

神の前にひざまずくようにと

弱さを授かった。

人生を享楽しようと、

あらゆるものを求めたのに、

あらゆることを喜べるように

命を授かった。

求めたものは、

一つとして与えられなかったが、

願いは

すべて聞き届けられた。

神の意に、

そわぬ者であるにもかかわらず、

心の中の言い表せない祈りは

すべて叶えられた。

私はあらゆる人の中で、

最も豊かに祝福されたのだ。

そして又、この詩と響き合うある詩を思い出しました。

ご存知の方も多いマーガレット・F・パワーズの「あしあと」と言う詩です。

「あしあと」

ある夜、私は夢を見た。

私は、主とともに、渚を歩いていた。

暗い夜空に、これまでの私の人生が映し出された。

どの光景にも、砂の上に二人のあしあとが残されていた。

一つは私のあしあと、もう一つは主のあしあとであった。

これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、

私は砂の上のあしあとに目を留めた。

そこには一つのあしあとしかなかった。

私の人生でいちばんつらく、悲しいときだった。

このことがいつも私の心を乱していたので、私はその悩みについて主にお尋ねした。

「主よ、私があなたに従うと決心した時、

あなたはすべての道において私と共に歩み、私と語り合って下さると約束されました。

それなのに、私の人生の一番辛い時、一人のあしあとしかなかったのです。

一番あなたを必要とした時に、

あなたがなぜ私を捨てられたのか、私には分かりません。」

主はささやかれた。

「私の大切な子よ。

私はあなたを愛している。

あなたを決して捨てたりはしない。

ましてや、苦しみや試みの時に。

あしあとが一つだった時、

私はあなたを背負って歩いていた。」

私は冒頭で、書くことは力であると申し上げました。

記念誌に載った全ての原稿から、どれほどの力を、励ましを与えられたことでしょうか。

6年間、神様の命ぜられるままに、この教会に赴任し、神様の命ぜられるままに、伝道に携わってまいりました。そして、その務めを終えようとしている今、かけがえのないキリストに捕らえられ、キリストに従う歩みをお一人おひとりから知らされました。

立川教会に呼び集められた私たちは、ここに集い、共に礼拝を守ることが許されています。私は、それで十分だと思いました。それ以上、何を望むことがあるだろうか。キリストに従う人生を、共に励まし、支え合い、感謝する、そのような群れで在り続けたいと思います。

今日、パウロが私たちに語りかけた言葉から、6節7節を読み、祈りましょう。

6：どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。

7：そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。